私たちはなぜ、間違った問題を工業的な手段で解こうとするのか

Eliakim M. Kambale

FF-0001 · v1 · ja · 2026-11-17

翻訳元 en v1

https://contributions-ledger.org/freeforms/ff-0001/v1/ja/

なぜ私たちは、過去の失敗を相手に何度も戦争をするのだろう。時には、その後に築いたすべてを危険にさらしてまで。人生で成功するとはどういうことなのか、私は考えている。注目され、称賛され、尊敬されることなのか。それとも、物事を動かせるだけの力を蓄えることなのか。野心に見えるものの一部は、ずっと前に起きたことへの答えを求める試みなのではないかと思う。真剣に受け止めてもらえなかったこと、気づいてもらえなかったこと、自分には特に面白いところも魅力もないと思わされたこと、などである。

人は時に、誰かが間違っていたと証明するために偉大なものを築く。自分を信じなかった親、能力を見くびった教師、自分を真剣に見なかった恋人。あるいは、男性教授に能力をけなされた女性が、フェミニズムに傾倒し、女性にも成功できることを示そうと、自分も教授になることを目指す。その達成には、相手へのメッセージが込められている。「私について、あなたは間違っていた」。これは男性にも当てはまる。高級車を買って、自分を振った女性の住む近所を走り回る男性。あるいは、元恋人たちに見てもらうため、新しい交際をSNSに載せる男性。何年たっても、その人の判断が、人生すべてをかけて努力する価値のあるものを決め続けているのかもしれない。

ただし、落とし穴がある。高校時代、自分は誰の目にも入らないと感じていた若いオタクを想像してほしい。彼は必死に働き、成功した実業家になる。人の注目を集めるようになるが、その一部は彼の地位や金に近づきたい人々からのものだ。魅力的になるために手に入れたものが、かえって、自分自身を望んでくれる人がいるのかを分かりにくくする。金と権力は周囲の人々の態度を変えても、誰かに見過ごされた時の彼の感情まで変えるとは限らない。世間のほぼあらゆる尺度で成功していても、走り出すきっかけになった問いに、なお心を奪われていることがある。

ジェンスン・フアンは、大学で妻のロリと知り合った逸話を好んで語る。何か月も一緒に宿題をしてから、ようやくデートに誘う勇気を出したという。その話で私の注意を引くのは、そこで行われた交換だ。彼は彼女の関心を得るために資源を提供し、それはうまくいった。もしかすると、ほかのやり方を学ばないまま、ロリだけでなく、おそらくほかの女性たちからも関心を得ようと、さらに大きな資源と権力を蓄え続けたのかもしれない。男性は皆、性的な関係を得るために何らかの代償を払うというのは周知のことだが、女慣れした男なら、ちょっとした冗談や口説き方、よい雰囲気だけで、一銭も使わずデートにこぎつけたかもしれない。問いたいのは、フアンが、自分を輝かせる外部の何かに頼らず、注目を集めることを学んだのかということだ。大学では、

それは宿題を一緒にすることでロリに約束した最高の成績だった。後には、金、名声、CEOの地位、そしてそれがもたらす影響力と権力になった。資源は増えた。しかし、愛情の求め方は一度 でも変わったのだろうか。

誰かに近づいて断られる危険を冒すよりも、恐れられるほど強くなるほうが、想像しやすいのかもしれない。あるいは、彼女の愛情が、もう二度と見過ごされない人間になりたいという別の願いと絡み合ったのかもしれない。一人の関心が、はるかに大きな雪辱の重みを担うことになる。求められれば満足するのか。それとも、なお、無視できない存在になる必要があるのか。

外から見れば、フアンの報じられた不倫とCEOの地位の喪失は、33年間築いてきたすべてを危険にさらす、愚かなやり方に見える。しかし別の角度から見ると、昔の傷がアキレス腱のままであり、妻との出会いを語るたびに、その弱点を世界中にさらしていたことに、本人は気づかなかったのかもしれない。少しの愛情や関心を示す女性なら誰でも、あの権力の下にいる若いオタクに届き得たのだ。彼が「悪い」決断をした、あるいは危険を見誤ったと思う前に、彼の潜在意識にとっては、その力が適切に使われていたのかもしれないことを忘れないでほしい。つまり、かつて勝てなかった戦争に勝つためである。彼にとって、それはわずかな報酬のためにすべてを投げ捨てることではなく、手に入れた武器を、本来の目的にようやく使うことだったのかもしれない。もしかすると私たちは、築いたものを、それ自体のために欲しかったわけではない。過去の失敗と戦うための戦争機械であり、勝とうとする過程で失ってもよいものだったのだ。

私たちは時に、台所の包丁でも終わらせられたかもしれない戦争のために、軍隊を築く。望まれる存在になりたい一心で何年も蓄財する人がいるが、女性を口説くことを学べば、もっと直接的に困難へ対処できたかもしれない。女性の関心を得られない男が軍に入り、厳しい訓練を受け、征服者になったり、悪役を倒す力を手に入れたりする、テレビドラマの筋書きを思い浮かべる。彼は、今度こそ彼女が違う目で見てくれることを期待して帰ってくる。もし才能を一つ願えるのなら、なぜ軍隊を倒す力や決闘に勝つ力を願うのか。なぜ、もともと話しかけたかった女性を魅了する才能や、そもそも彼女の関心を必要としなくなる力を願わないのか。

自分を変えることを避けるためだけに、人が驚くべきことを成し遂げ、世界まで変えてしまうことに、私はいつも驚かされる。責任を引き受けることをひどく恐れるフェミニストたちを思う。女性の安全を追求する中で、自分たちや年下の少女たちが危険を見抜き避ける方法を学ぶよりも、男性を同意や境界線の尊重について再教育し、女を傷つけてはいけないと少年たちにたたき込むことを選ぶ人々である。

私にとって本当のエンパワーメントとは、どこにいても自分を守る方法を学ぶことだ。加害者になる可能性のある人々の教育を左右できる国に、運よく暮らしているかどうかに依存すべきではない。制度を完成に近づけることはできても、すべての少年が正しく「フォーマット」されて育つとは保証できない。一人でも不具合を抱えて出てくれば、危険は依然として外に存在する。

もっと簡単で実際的な解決策は、人間の本性を深く理解し、その理解をどこへでも持っていくことだろう。そうすれば、男性の世代全体を作り直す大きな政府を必要とせずに、危険を認識し避けられる。

話を脱線させるつもりはないが、なぜあなたの安全が、社会全体を作り変えてでも実現すべき究極の善なのだろう。自分の快適さのために、ほかのすべての人を型にはめる権利は、どこから来るのか。自分が努力しなくて済むように、他人の生き方を決めるのは、思い上がりであり、独裁的で自己中心的ではないか。私はそこに、お姫様や女神のような心性、ある種の独我論を見る。すべては私を中心に回り、誰もが私と私の必要に仕えるべきだ、という考え方である。

無責任な男性に赤ん坊を抱えたまま置き去りにされたと非難するシングルマザーにも、同じ型が見える。もっと信頼できる相手を選ぶことも、結婚するまで脚を閉じておくこともできた人はいるだろう。私にはこれが、女性を口説く方法を学ぶ代わりに、彼女の関心を期待して世界を征服する男と重なって見える。要するに、間違った問題をせっせと解いているのだ。

男性はしばしば実際的な解決策を選ぶ。虚偽の告発を避けるために、扉を閉めたオフィスで女性の同僚と話すこと、女性の同僚と遅くまで職場に残ること、女性と二人きりでエレベーターに乗ることなどの状況を避ける。無実の男性がしてもいないことで偽りの告発を受けることが絶対にないよう、女性の世代全体を作り直す必要はない。自分の行動を調整するのだ。この点では、男性のほうが実際的である。しかし女性を口説くことになると、その実際性を忘れてしまう。なぜだろう。

もしかすると、女性を口説くことが、自分を見直させることと絡み合っているからかもしれない。彼は彼女の関心によって、自分に関するある問題に決着をつけたいのだ。自分は望まれる存在であり、自分を見過ごした人々は間違っていて、もう二度と取るに足りない存在にはならない、と。自分を守る時には、制約を受け入れて行動を調整できる。しかし彼女の無関心は、自分の価値に対する判定のように感じられるため、受け入れにくいのかもしれない。口説き方を学んでも、自分自身を拒まれる可能性は残る。金や地位、権力を蓄えることは、いつか拒むことのできない存在になれるという幻想を与える。

資源を築くことには、慣れ親しんだ何かもあるのかもしれない。彼は働き、競い、蓄える方法を知っている。それらの守りを持たずに誰かに近づくには、別の力が必要であり、それこそ人生をかけて避けてきた力かもしれない。彼の推論は、自分が一度も検討したことのない感情的な目的に仕えながら、きわめて有効に働き続けることがある。並外れた能力が、間違った問題を解くために注がれることもあるのだ。

ここで、魔法の力を求める普通の男の話に戻る。なぜ「二度と拒絶されないこと」を願い、「拒絶に対して免疫を持つこと」を願わないのか。前者は、制御できない相手の反応に重荷を負わせる。彼の安心は、彼女が自分を望み続けること、誰かが自分の価値観を守ってくれるように振る舞うことに依存している。どれほど強大になっても、彼女は別の人を選ぶことも、単に気持ちを変えることもできる。彼が手に入れようとしている守りは、完全には確保できない。

拒絶に耐えられるようになるほうが、身につけるべき力として有用に思える。免疫という言葉で考えているのは、何かを大切に思う余地が残るものだ。特に相手が大切な人なら、拒絶はやはり痛む。しかし失望を、何年もの達成によって覆すべき判決にする必要はない。断られても、自分について信じるすべてが脅かされるのでなければ、欲しいものを求める時のためらいは減る。人に近づき、関心を示し、提案できる。その自信が開く扉もあるだろう。開かない扉があっても、

自尊心を下げたり、人生の残りを不十分だと感じたりする必要はない。魔法の力を求める普通の男は、特別な存在になる前に、彼女に話しかけてもよいのだ。その後には、戻るべき自分の人生がある。

役立ちそうな心構えは三つある。「これも、いつかは過ぎ去る」は、気持ちが変わる時間を与え、拒絶の痛みを和らげてくれる。「拒絶は方向転換」は、別の扉をたたき続ける意欲を取り戻し、注意を向ける新しい先を与えてくれる。そして執着を手放すことは、受容の状態を保つ。結果がどうであれ、あなたは生き続ける。今までも、それなしに生きてきた。実現しなければ、それなしに生き続けることもできる。それでも望んでよいし、手に入れる努力をしてもよい。それなしでも生きられる可能性が、聞きたくなかった答えも含めて、返答を受け止める余地を生む。この意味での癒やしには、昔の感情に再び出会っても、それに対する新たな戦役を組織せずに済むことが含まれるだろう。

物質的な三次元の世界で戦うのではなく、自分の内側で戦うべき戦争もある。イエスの「私の国はこの世のものではなく、上の世界のものだ」という言葉を思う。そして、ユングの言葉として親しまれている言い換えも。「無意識を意識化しない限り、それがあなたの人生を支配し、あなたはそれを運命と呼ぶことになる」。

私たちの衝動の多くは、理性的な決断ではない。感情的な反応である。誰かに拒絶され、侮辱され、あるいは少し関心を向けられると、突然、その感情を中心に人生を組み立てようとする。フランクルの精神に沿う努力とは、刺激と自分の反応の間に少し距離を置き、どの反応が適切かを選べるようにすることだ。軍隊を築く前に、その感情がそもそも戦争を必要としているのか、問うべきなのかもしれない。

引用情報

Eliakim M. Kambale. (2026-11-17). 私たちはなぜ、間違った問題を工業的な手段で解こうとするのか. Freeforms, FF-0001, 版 1 (ja). https://contributions-ledger.org/freeforms/ff-0001/v1/ja/